慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	浜松中納言物語の夢 (上) : その語彙の頻度に就いて
Sub Title	A study of the word 'Dream' in Hamamatsu-Chunagon-Monogatari (I)
Author	池田, 利夫(Ikeda, Toshio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1964
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.18, (1964. 9) ,p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00180001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浜松中納言物語の夢（上）

――その語彙の頻度に就いて――

池田利夫

一

浜松中納言物語に屢〻夢の記述があり、それがこの物語の特質の一つであることや、作者であろうと考えられる菅原孝標女の回想記、更級日記に亦夢が多く語られていること、従って、両者が同一作者の手になる蓋然性が強いことなどは、既に多くの先覚によって検討されてきた処である。そこで、今更、こと新しくこの問題を採り上げるまでもないようであるが、従来、この夢の特質が作者論に関してのみ言われてきた傾きがあるし、この物語の研究を志す筆者にとって、もう少し広い範囲の中からその考えを明らかにしておきたいと思うので、夢という語の検討とともに、ひとわたり述べてみたい。

人の、夢に対する信仰の歴史がどこまで辿れるかは俄かに論じられないが、人神未分化の古代人にとって、時間や空間の次元を異にする夢は、一つの奇蹟ででもあったであろう。日常の経験や深層の心理がいかに夢の中に脈絡を与えるかは心理学の関心事であろうが、古代人にとって、恐らく現代の我々に於てさえも、夢は逆に、おのれの将来とのそこはかとない結びつきに思いをいたさせるので

ある。古事記中巻で、神武天皇が大熊に出会って皇軍もろ共正気を失った時に、その熊野村の高倉下が奉った横刀は、天照大神と建御雷神が、夢の中で授けたもので、忽ちにして荒神を平定してしまうが、又、崇神天皇の御世に疫病が流行した時も、夢に大物主神が顕われて祭祀を求められるし、沙本毘古王の謀叛を、垂仁天皇は、皇后沙本毘売の涙に濡れながら見る夢で知るのである。

説話に見る夢は概ね内容と意図が明白であるが、現実の生活では必ずしもそうではない。垂仁天皇の夢はみずからは異夢といぶかり、是何の表にかあらまし、と思われるだけであるが、それを皇后が、兄の謀叛であると解くのである。この、夢を合わせる、夢を解く、占うということも早くに行われており、下って平安時代に入っても、物語や日記にしきりに見える「夢解き」は、それを専ら司る者として知られている。そして、大鏡の兼家を語る記事の中で「その程は夢ときも、かむなぎもかしこき者どもの侍りしぞとよ」とあるように、夢ときにも上手下手があり、蜻蛉日記に見える「そらあはせ」という言葉も、時にはささやかれたらしいことがわかるのである。

福井久蔵博士の調査（「夢の文献について」古典研究・昭和十六年九月）によると、万葉集にはいめを含んだ歌が五七首、国歌大観ではゆめを含む歌が一〇一三首、更にいめを加えると一〇七〇首に達するという。これらによっても、古代人の夢に対する関心の高さが想像されるが、一方、その関心の度合ということになれば、一律ではありえない。夢への関心が特に高かった人、として取りあげられるのが、菅原孝標女であり、そうした資性は、仮に物語を書いた時にもあらわに示されるであろうかという興味もある。それらに就いても考えていきたい。

二

源氏物語の最後の帖は「夢の浮橋」であり、源氏各帖の名の中で、「夢」の文字をとどめるのはここだけである。嘗て池田亀鑑博士は、この巻名について論及された際（「新講源氏物語」下巻四七六頁）、「夢」の語が場に応じて解釈すべき色々な内容を持ってはいるが、源氏を三部にわけたその外面的な統計をとってみると次のようになる、と示された事があった。それは

第一部	三十三帖中	六〇（平均一帖に一、八）
第二部	八帖中	三七（平均一帖に四、六）

第三部　　十帖中　　四六（平均一帖に四、六）

とあり、以上からも、源氏がある方向に向って性格的なもの――夢幻的なもの、憧憬的なもの、または宗教的なもの――、を強化しつつあることが知られる、とされた。ここで特に私が源氏に触れたのは、浜松中納言物語が源氏の、就中宇治十帖の影響を強く受けている一方、孝標女もそれを熱愛耽読したことと、夢の記述の多いことが、自然、浜松・更級に「夢」の語を頻出せしめているからである。ところで、この池田博士の示された統計は、外面的であるだけに、いささか修正を要する。一つには、一帖平均といっても、源氏は各帖の長短の差が甚しく、たとえば、最短の篝火に比べて、最長の若菜上は三十倍以上もあるという工合であるから、語の頻度を考えるならば、一帖平均値では不都合であることと、もう一つは、語の数そのものが異ることである。以前、私が岩波文庫本源氏から拾い出した数によると（その後索引を用いて検したが勿論同じであったが）「夢」の語に、五例の「御夢」を含めて、次のようであった。

第一部　七二　　（平均一帖に二、二）
第二部　三二　　（平均一帖に四、〇）
第三部　四五　　（平均一帖に四、五）

もしこれに「御夢語り」「夢語り」「夢路」「夢見」という派生語を含ませると、第一部七五、第二部三八、第三部五一、となるが、いずれにせよ、部を追って一帖平均の頻度が漸増するように見える点は同じである。ところで、もう一つの一帖の長さであるが、その時、ほかの必要もあって、源氏各帖の長さを、岩波文庫本の活字数で概略はかった事があった。字詰と行数の乗算であるし、こまかく言えば、漢字の当て方によっても多少は動くが、大略を見るには一向差しつかえはない。分量の多い帖から十帖程を順次見れば、若菜上（四五四〇〇字――概数なので下二桁は示さない。）若菜下（四五二〇〇）　宿木（四二五〇〇）　総角（三九八〇〇）　浮舟（三二一〇〇）　夕霧（三二〇〇〇）　手習（三〇八〇〇）　東屋（二九〇〇〇）　蜻蛉（二五八〇〇）　賢木（二二六〇〇）……となり、短い方から見れば、篝火（一五〇〇）　花散里（三〇〇〇）　関屋（三七〇〇）　花宴（四七〇〇）　空蟬（五一〇〇）　紅梅（五七〇〇）　匂宮（六二〇〇）　初音（六四〇〇）　鈴虫（六四〇〇）　藤袴（六五〇〇）……という工合である。これを加えていって、前の各部における一帖平均がどうであるかを見ると次のようである。

第一部　三十三帖合計　四〇七、三〇〇字　（一帖平均　一二、三〇〇字）
第二部　八帖合計　一七三、九〇〇字　（一帖平均　二一、七〇〇字）
匂宮・紅梅・竹河三帖合計　三一、一〇〇字　（一帖平均　一〇、四〇〇字）
第三部　十帖合計　二四九、七〇〇字　（一帖平均　二五、〇〇〇字）
源氏物語五十四帖総計　八六二、〇〇〇字　（一帖平均　一六、〇〇〇字）

即ち源氏物語は、第一部の一帖平均の長さを一〇〇とすれば、第二部は一七六、第三部は二〇三というように増大していることがわかり、この物語自身の問題としても興味がある。（なお、作者が問題にされる匂宮以下三帖は一三〇に当るが、これは僅か三帖なので、作者問題を考える上では参考にもなるまい）

以上からわかったことは、一帖平均の夢の語の頻度も増すが、各部の一帖の平均の長さも増しているので、頻度を形式的に見ようというのであれば、その点を考慮しなければならない事である。そこで、この「夢」の語の頻度を、仮に本文一万字当りの数値で示せば、

	「夢」語数	頻度
第一部	七二	一・七七
第二部	〃　三二	〃　一・八四
匂・紅・竹三帖	〃　二	〃　〇・六四
第三部	〃　四五	〃　一・八〇
全五十四帖	〃　一五一	〃　一・七五

となり、指数を二桁にとれば、いずれも一・八となって、各部は同じ頻度で「夢」の語があることになる。（ここでも、匂宮以下三帖の頻度が甚だしく低い事を理由に、作者問題に論及するのは無理であろう。）

ある語がある作品にどういう頻度であらわれるかは、作品の内容、場面によって動いてくるので、頻度だけを根拠に、作品の本質を論じたり、いわんや作者問題を云々したり出来なかろうとは私も考えるが、作品の量がかなりあり、平安時代のように、狭い貴族社会をのみ描いている場合、そこに作品の傾向や作者の好みの一端が見られないこともなかろうと思う。いわばそうした瀬踏み程度に語の

頻度を考えた上で、以上の結果を眺めると、各部が同じ頻度を持つのは、作者が同一である事の要素が多分に関与したからかとも思う。しかし一方、各帖ということになるとそれは甚しく異る。藤袴、真木柱、梅枝と続いた三帖に「夢」の語が見えない事もあるし、夢の話が四つも語られる明石では十七語も「夢」があり、頻度は九・二となってしまうのである。

そこで本題の浜松中納言物語ではどうであろう。浜松に夢の話が多いのは知られている通りであるが、従って「夢」の語の頻度が高くなることも予想される。源氏にも夢の話は二十二箇所にあらわれ、それも第一部、第二部、第三部に、一二、四、六、と、ほぼ分量比に比例して（各部の長さを整数比で示せば、五、二、三、となる）あるから、語の頻度が同じであるのも肯けるのである。ここで浜松との頻度を比べるについて困るのは、テキスト、校訂者が異なると、漢字の当て方がそれぞれ異なって、前のように活字数で比べられないことであり、それには音節数（全部を仮名で書いた時のその数にほぼ等しい）に依る必要が生じるのである。といって、まさかに指を折って数えもならないので、実際にはまず活字数を概算し、それぞれのテキストから何頁かを無作為に選んでそれだけの音節数を数え、活字数との比率の平均値を求めて全体の音節数を推計するのである。こまかい事は省いてこの方法を用いて計算した結果だけを示せば、推計総音節数は、源氏物語が約一〇二万、浜松中納言が約一五万七千で、源氏は浜松の六・五倍であることがわかる。そして「夢」の語の頻度も、一万活字数当りで見るのではなく、一万音節数当りによって見るべきであろう。又、単に源氏と浜松と比べるのも意味がないので、周辺のいくつかの作品をも多少含めて示してみよう。

（作品）	（総音節数）	（「夢」の語の数）	（「夢」の語の頻度）	（夢の話の数）
伊勢物語	三万五千	六語	一・七一	一
蜻蛉日記	一〇万二千	二六語	二・五五	一〇
源氏物語	一〇二万	一五一語	一・四八	二二
紫式部日記	四万一千	四語	〇・九四	〇
枕草子	一五万二千	四語	〇・二六	一
和泉式部日記	二万五千	八語	三・二〇	〇

浜松中納言物語	一五万七千	八五語	五・四〇	一三
夜半の寝覚	二〇万四千	五二語	二・五四	四
狭衣物語	二五万一千	四八語	一・九一	一二
更級日記	三万四千	二〇語	五・九〇	一一

以上の表を見て気づくことは、「夢」の語の頻度が、浜松と更級で最も高く、且両者が極めて近似した数値を示していることと、ついで和泉式部日記が、夢の話が語られていないのに高く、蜻蛉、寝覚がほぼ同じで、以下狭衣、伊勢、源氏とゆるやかに減り、紫式部につぐ枕草子に至って急激に落ちている。ここで早計に都合の良い事を言えば、浜松と更級が他より際立って高い頻度を示しているのは、作者が同一人であることに依るとの結論も出せようし、瀬踏み程度としては、その一傍証と考えてよかろうとも思うが、反面、都合の悪いこともある。第一には、寝覚の作者はこれによって異なるといって良いのか、もう一つは、源氏と紫式部日記との違いをどう考えるかなどである。そしてここで考えるべきは、形式的な統計とはいえ、各作品間の量が各々大きく異なる点である。源氏は紫式部の約二十五倍の量であり、今仮に、両作品が「夢」の語を一つずつ増したとすると、源氏の頻度は一・四八→一・四九となって殆んど同じであるのに、紫式部では〇・九八→一・二二となって両者は接近するのである。即ち余りに異なり過ぎる量を持つ作品間の頻度の比較は大まかに見る必要があるのである。

一方、夢が作品の中で語られる数の方は、数だけなら、源氏が最も多く、以下、浜松、狭衣、更級、蜻蛉、寝覚、枕、伊勢の順となるが、これも作品量を考えての割合からみれば、更級がずば抜けて多く、以下、蜻蛉、浜松、狭衣、伊勢、源氏、寝覚、（枕・紫・和泉は夢の話がない）の順になる。夢の話については第四節以下（次号）で述べるが、これは前の頻度の順と一見似ていて、両者はほぼ比例するのかと考えさせられるが、実は違う。たとえば、寝覚と狭衣では作品量は近いのに、前者は夢の話が後者の三分の一しか語られていないが、語の頻度では逆に高くなっているし、又、浜松と更級の夢の話は十三と十一で二割程の差しかないが、作品量は浜松が四倍半以上もあって、割合から見れば、「夢」の語の頻度は更級が四倍近くあっても良い筈なのに、実際はほぼ同じである。これらは、一体どうしたことであろう。それでも、大ざっぱに見て、夢の話と語の頻度の関係から作品を分類してみると、次のようになる。

1、夢の話が多く、語の頻度も高い作品――更級日記・浜松中納言物語
2、夢の話が少く、語の頻度も低い作品――枕草子
3、夢の話の多い割に、語の頻度が高くない作品――狭衣物語・蜻蛉日記・源氏物語
4、夢の話が少いか無い割に、語の頻度が高い作品――夜半の寝覚・和泉式部日記

以上から直ちに何が結論づけられるというものではないが、更級と浜松についての類似性は、ここでもかなりあらわである。ただ、「夢」という語の頻度の違いが一体作品として何を指し示していると考えてよいのか、それを検討するための一つの方法は、その語が実際にどのような意味で使われているかを見ることにあろうかと思うのである。

三

「夢」という語が、「夢路」「夢見」「夢語り」「夢解き」のように派生語をなす外、「夢うつつ」「夢まぼろし」のように他の語に接して対照的に用いられるのは、中古以後の作品に屢々見られるのであるが、上代では、万葉集、古事記を見ても、せいぜい地名の「夢の淵」がある程度で、他の成語は余り見当らない。もっとも、万葉集に於ても、熟合せぬまでも、「夢」と「現」が対比してうたわれる例は珍しくない。

現にはあふよしもなしぬばたまの夜の夢にを継ぎて見えこそ　（巻五　家持　岩波文庫本による）

うつつにも夢にも吾は思はざりき旧りたる君にこゝに会はむとは　（巻十一）

しかしこれらも、中古の「夢うつつ」が持つ意味や用法にはやや遠く、現実にではないが、ヂカにではないが、せめて夢で、という心持がある。

伊勢物語六九段の、斉宮とあかぬ一夜を過した既の二人の贈答歌は有名である。

――女のもとより詞はなくて

君やこし我や行きけむおもほえず夢か現かねてかさめてか

をとこ、いといたう泣きてよめる

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひ定めよ

ここでは夢か現実か、両方が入りまじって判然としないといい、男は、それをはっきりさせたいと言っている。そこにまだ、「夢うつつ」の語に一種の新鮮味を感じさせるが、次第にこの言葉は固定化観念化していく。浜松の中納言は、自らの心を「夢現（ゆめうつつ）とも知られぬ心のみだれ」（巻五）と呼んでいるが、「夢現とも知られぬ心」即ち「夢現の心」というようになるのも、間もないことであろう。こうして、「うつつ」と対比された夢は、一方、それと区別出来ないという発想を生んで、「夢」の語の本来の意味から、そのさまざまの属性が強調され、表面の意味にとって代ろうとするのである。

凡そ、「夢」という語が、時に応じて多くの意味に解釈されるというのも、はじめからそうであった訳ではあるまいが、中古では明らかにその分化が認められる。親行が、「夢浮橋」の帖における夢の語を「いづれもはかなき心なり」と述べたのは、その一属性を示したものである。それが当時いかに多様に解せられていたかは、見方によっていくつにでも分けて考えられようが、試みに整理して次に示してみよう。

○一類　夢そのものの意である。

——行ひさしてうちまどろみたるゆめに　（更級日記）

○二類　所謂「はかなき心」が下にある。

ゆめよりもはかなき世の中を歎きわびつゝあかし暮す程に　（和泉式部日記冒頭）

「夢よりもはかない世の中」とは言っているが、もとより、夢よりはかないものはないの心が下にあっての上である。これには、浅ましう、今までながらへ侍るやうなれど、思ひさまさむ方なき夢に惑はされ侍りてなむ——　（源氏・椎本、大君の詞）

に見られるように、煩悩といった意味に更に固定化して考えて良い場合も含まれている。又、「夢醒めて」という慣用句もある。

○三類　「まことと思へぬ」心が下にある。

なほいとゆめの心地し侍るを、如何にし侍るべきにか　（源氏・若紫）

これは前の「はかなき心」と通じる点もあるが、内容が軽い。「夢の心地」「夢のやうに」として頻りに使われる。今で言えば、「ホントノ気がシナイ」「ウソノヨウダ」に近い。「うつつ」の対ともなる。

○四類　「夢にも」「夢に」で、「少シモ」「イササカモ」の意の副詞句として使われる。副詞の「ゆめ」とは区別する。

うちとけてうらみ顔なる気色、ゆめにももらさず　（寝覚・巻五）

○五類　男女の契りを示す。逢瀬。

春の夜の夢に見し人、かたちも琴の音も后に似奉りたるにこそ　（浜松・巻一）

これは、一夜をともに過したということと、実際に起ったとは思えぬような、しかも動かしがたい事実を下に示している。男女の契りと言っても、殆んど、ある二人の、ある夜の、ある場所でのそれを意味している。

以上のほかにも考えられる方法はあろうが、まずこの程度に落着けて考えたい。なお、現在では「夢」の語に「希望」「理想」という義を持たせて、「……ニナルノガ僕ノ夢デス」のように使うが、上記作品の用例中からは見当らない。現実になしえないことを、夢を見て、それをせめてもの頼みに、将来の希望に、と思う例は、万葉集の恋人を想う夢にも、更級日記の後世を頼む有名な夢にも、屢々見られるが、「夢」の語それ自体を抽象化して、その意味に使うことはないようである。

さて、以上のような大凡の分類を試みて、前の各作品中の「夢」の語の頻度を、少し内容に立ち入って見直してみよう。個々の作品に就いて見ていくのは徒らに長くなるので、まずその一覧表を示す。

作品	用例数	一類 ＜ゆめノモノ＞	コノ類ノ頻度	二類 ＜ハカナキ心＞	コノ類ノ頻度	三類 ＜マコトラシカラヌ心＞	コノ類ノ頻度	四類 ＜少シモ・ツユモ＞	コノ類ノ頻度	五類 ＜一夜ノ契リ＞	コノ類ノ頻度	作品全部ノ頻度
伊勢語物	6	1 (16%)	0.29	1 (16%)	0.29	2 (33%)	0.57	1 (16%)	0.29	1 (16%)	0.29	1.71
蜻蛉日記	26	16 (63%)	1.6	2 (8%)	0.2	2 (8%)	0.2	5 (19%)	0.48	1 (4%)	0.1	2.55
源氏物語	151	63 (42%)	0.62	14 (9%)	0.13	56 (37%)	0.55	11 (7%)	0.10	7 (5%)	0.08	1.48

	更級日記	狭衣物語	夜半の寝覚	浜松中納言物語	和泉式部日記	枕草子	紫式部日記
	20	48	52	85	8	4	4
	16 (80%)	31 (65%)	11 (21%)	25 (29%)		1 (25%)	
	4.7	1.2	0.53	1.6		0.07	
	2 (10%)	3 (6%)	5 (10%)	9 (11%)	1 (13%)		
	0.6	0.11	0.25	0.60	0.41		
	2 (10%)	7 (15%)	24 (46%)	23 (27%)	2 (25%)	2 (50%)	3 (75%)
	0.6	0.28	1.2	1.5	0.80	0.13	0.74
		4 (8%)	4 (8%)	9 (10%)	2 (25%)	1 (25%)	1 (25%)
		0.15	0.20	0.54	0.80	0.07	0.25
		3 (6%)	8 (15%)	19 (22%)	3 (38%)		
		0.11	0.38	1.2	1.2		
	5.90	1.91	2.54	5.40	3.20	0.26	0,98

この表の各類の%は、その作品の「夢」の語の全用例に対する割合で、「コノ類ノ頻度」とあるのは、それぞれの類の用例の、同じく本文一万音節数中に於ける頻度である。即ち、一作品内に関して見るなら%で見れば良く、各作品間の比較をするなら、各類の頻度によるのが良いのである。いささか煩瑣な表であるが、伊勢、紫、枕、和泉、といった用例数の稀少な作品に就いては、各類の%やら頻度やらは、たいした意味を持たないと思って見れば良いであろう。

ところで、この表で直ぐ気付くのは、第一類、即ち夢そのものを指す用例の頻度が、作品により、かなり変化を示している点である。更級が著しく多く、次に浜松と蜻蛉が大分下って続き、狭衣がそれにつぎ、源氏が一段と又下って、寝覚がそれについでいる。これで、前節における疑問の一つは解けるのである。夢の話が多ければ、「夢」の語も確かに多くなろうが、それは一類にのみ関係するという、ごく当然な処に帰するのである。寝覚と狭衣の間で、後者は夢の話が三倍も語られるのに、語の頻度で逆に増していたのは、一類以外の例が寝覚に多いからであり、一類に限れば、狭衣はやはり三倍の用例数を持っているのである。又、浜松と更級を、夢の話も、頻度も多い作品としてあげながら、夢の話の割合からして頻度が同じになるのはおかしいと言ったのは、同様、第一類の差によ

るのである。即ち、頻度の趨勢は一類のそれによることが多く、一類であれば、それは語の頻度の問題より、夢の話が語られる度合によって論ぜられるべき事柄であろう。本節で語の頻度を問題にしようとするなら、それはまず、第二類以下の傾向に注目すべきかも知れない。

土左日記と竹取物語には「夢」の語がない。（堤中納言物語では、「虫めづる姫君」「思はぬ方にとまりする少将」に各一、「はなだの女御」に二例あるのみで他はないが、いずれも作品自体が個々では余りに短か過ぎるので、頻度を考える対象とはなりがたい。）土左も竹取も短く、土左などは更級の半分程しかないが、幾分興味を持たせるのは、土左が道中の記であり、竹取が伝奇的、時には夢幻的作品として受けとめられている事にある。更級がその量からしてどれよりも夢が多く語られ、語の頻度も極めて高いのに、始めの五分の一程、東海道を上京する道中記の部分では、夢の話はおろか、その語すら見えない。尤もこれで、土左日記に「夢」の語の見えない説明をしようとは思わない。恐らくは偶然であろう。竹取物語ではどうか。これが一篇の夢物語であるから、というのではこの物語の評価としても落第であろう。つまり、作品が短く、夢の話が無いという説明は付会以上に出来がたいのである。

枕草子があれだけの量でありながら、夢の語をわずか四例しか有していないのは、他と比べて著しく、これは、清少納言の性格的な一面を感じない訳にはいかない。現実礼賛に終始した彼女が夢に殆んど関心を示さなかったからであろうか。「うれしきもの」の段で彼女はこう言っている。

いかならむと思ふ夢をみて、おそろしと胸つぶるるに、ことにもあらずあはせなしたる、いとうれし

これは必ずしも自分の経験と考えなくても良いであろうが、気掛りな夢を、夢解きがたいしたことはないと判断してくれた時のうれしさは積極的に認めている。決して夢に関心がなかったのではないが、ただそれ以上に、現実に興味を抱いていたのであったろう。

蜻蛉と更級は数字の上からみると、二類以下に特別の変化はなく、これは夢の話の方で検討すべきであろうが、強いて言えば、更級に四類の例がない。夢を重視した孝標女は、「夢にも」「夢に」の形で、「少シモ」「チットモ」と、副詞風に軽く扱えなかったのであろうか。

一方、物語を見ると、源氏以後のそれが、いずれの類も頻度が高くなっている点に留意される。浜松が特に著しく、寝覚、狭衣と続

いているが、一類で言えば、狭衣は当然寝覚より多く、寝覚は源氏より更に低い。

平安末期の物語に、超自然的事件が屢々語られることは、この三物語にもあらわれているが、特に後で述べる狭衣は、同じ夢でも神の示顕と思われる場合が多く、浜松と狭衣は一類の頻度が近いと言っても、更に中を割ってみる必要もある、又、二類以下の頻度は、源氏が0.86になるのに、狭衣0.65寝覚2.23浜松3.84と、各々大きな異なりを見せているが、これも一類の再検討――夢の話の検討――を俟たずに結論を急ぎ過ぎるのは危険であろう。ただここでせいぜい言えることは、狭衣が二類以下の頻度が源氏より低くなってしまったのに、浜松と寝覚は飛躍的に高いことであり、浜松は夢が多く語られる以上に、語の頻度が高い方にむしろ顕著さが認められ、このことは寝覚に於ても（夢がそう多く語られていないのに）言えることである。三物語はいずれも源氏の影響を強く受けているが、夢の語だけについてみても、浜松寝覚は、狭衣と対蹠的位置を占めている。浜松では「夢」という語の響きに、他のどの作品よりもはかなさを感じ（二類）、更に夢は現実ではありえないのだという意識を強く持ちながら（三類）、なお夢に頼らなければきていかれない態度を示している。更に言えば、寝覚では、夢のはかなさ、空しさを強く感じる点では共通しながら、転々生起する人間の苦悩に宿世の業を識り、人の心、性格、立場が織りなす運命に必然性さえ示しつつも、なおその宿命を夢の形を借りてあらわさずにいられなかったのであろうか。それに対して狭衣では、夢を多く語り、物語構成上にあらわな位置をとりながら（後述）、夢への関心や信頼が薄いことが、かなりはっきり汲み取ることが出来る。これを以て浜松・寝覚を同一作者とする一傍証とはしないが、三者三様の中に、二つの立場を感じないわけにはいかない。

伊勢、紫、和泉については、短い作品なので特に触れないでしまったが、伊勢では六例中五例が、和泉では八例中七例が歌の中の例であることを報告しておく。古今集にも夢を詠んだ歌は三十余首もあり、和泉式部集にも多く見られるが、小野小町も屢々夢を歌ったことで良く知られている。紫式部の四例は逆にすべて歌ではないが、歌自体が少ない（十八首）のを見れば当然で、何も主張しないのが順当であろう。

かくして、「夢」の語の頻度を問題にして、作品を論じてみたのであるが、大体、いかなる内容を持つ語であっても、一語の頻度を以て作品を論じようというのは、時に一面を伝えないでもないが、土台無理である。たとえば浜松の頻度が高いと言っても、ほぼ同じ

分量の各巻の夢の語の分布ということになると、次のようになってしまう。

巻一、二四例。　巻二、五例。　巻三、一五例。　巻四、一七例。　巻五、二四例。

つまり頻度五四という数値も、中を覗いてみれば、巻々によってこんなにも違うのである。これは前にも触れたように源氏物語にしても、三部構成に見た各部の頻度までは一致したが、例えば帚木に三例あり、これとほぼ同じ長さ（二万字前後）の帖を見ると、夕顔三、若紫八、葵三、賢木二、須磨三、明石一七、少女二、玉鬘五、と大きな差がある。しかしこれも尤もなことで、物語の筋に起伏があるように、すべての語のあらわれ方にも起伏が生じるのであり、それをならしたものの中から、その作品の平均的傾向を見ようとするのが頻度を問題にする目的であるからである。

ところで、夢の語の頻度の中で、二類のはかない心を伴った語が源氏物語で十四例、浜松中納言物語で九例であるから、その分量比を考えれば浜松が五倍近くも増している勘定になる。これを以て源氏から浜松へ、文学理念又は情緒の一端としてでも、はかなき心が増したと言えるであろうか。もう一つの資料を示してみよう。「はかなし」という形容詞がある。これには「ものはかなし」「心はかなし」という形の語もあるが、それらを含めないで（含めても微々たるもの）両作品を比べると次のようである。即ち、源氏物語二九〇語、浜松中納言物語一三語で、源氏がいくら長いと言っても浜松の二十数倍ある訳ではなし、結局頻度としては、源氏の方が三倍半程多いのである。しかしこれも矛盾ではない。何故なら前者は「夢」に関しての「はかなさ」を問題にしているのであり、後者ではまだ、何にはかなさを感じ、「はかなし」の語が正確にどのような意味を持つのかの検討がなされていないからである。それもこれも、一資料として見れば一つとして無視して良い訳はないが、飜って、一体一二の語彙の頻度によってのみ作品が語りうるものかどうか、甚だ疑わしい。資料なるが故にそれは厳に客観性を要求されはするが、その処理に当っては、形式的に論じつくされるものではない。即ち、こうした資料は、作品論の中に還元されてこそ始めてある効果を期待できるのであり、本題の場合では、範囲をせばめても、夢が作品の中でどう語られているか、人それぞれがそれをどう受け取っているか、又それらが作品の中でいかなる位置を占めているか、という問題に進めなくてはならない。その意味で、以上のこまごまとしたデータは、次節へのいわばプロローグに過ぎないが、それら夢に関しての本質的な問題に就いては、紙幅の都合で、次号に述べよう。

参考・統計に使用したテキスト

源氏物語（岩波文庫本）　蜻蛉日記・紫式部日記・枕草子・更級日記（日本古典全書本）　伊勢物語・和泉式部日記（日本古典文学大系本）　浜松中納言物語（新註国文学叢書本）　夜はの寝ざめ（藤田増淵校註本）　狭衣物語（有明堂文庫本）